

復本一郎著

『日野草城 俳句を変えた男』

(角川書店・2005年・2800円)

東北大学大学院文学研究科教授 佐藤伸宏

復本一郎氏著『日野草城 俳句を変えた男』は、平明達意の文章によって、俳人日野草城の始発から晩年に至る歷程を縦横に論じた好著である。

著者はまず、結社誌や俳句雑誌の周到的な調査を踏まえながら、草城の人間的魅力を丹念に描き出していく。そうした草城の人間像を縦糸として、草城俳句の鋭利な解釈がそれに織り合わせられる。それによってテキスト全体をとおして、「新精神」に支えられた「新興俳句」—モダニズムの運動から「諸人旦暮の詩」の境位へと至り着くことになる草城の「俳句作家」としての全貌が鮮やかに映し出されるのである。作者の人間像と俳句作品とが交差する地点において、その魅力が見事に語り出されていると言ってよい。

「あとがき」によれば、著者が草城「評価」を企図する一書の執筆を思い立ったのは「十数年前」のことであるという。そうした長年月に及ぶ草城への親炙、そして数多くの業績を持つ近世・近代俳論史の研究者としての学識、鬼ヶ城の俳号をもつ実作者としての創作体験に裏打ちされることによって、本書の草城「評価」は極めて説得的なものとなっている。その「評価」の焦点は、「俳句を変えた男」という副題に集約的に示されている。著者は、病臥後の晩年期の作品を評価する一般的な草城観に対して、「俳句世界を一変させ」たその俳句

変革の試みの成果を、『花氷』を中心とした初期の草城の作句活動のうちに見出そうとする。具体的には、日常的な素材あるいは対象を美的に形象化することによって、「子規の「写生」の世界、あるいは、虚子の「花鳥諷詠」の世界を突き抜けて、唯美の世界に到達し得た」(97頁)点、「無季の句に対して積極的姿勢を示した」(188頁)こと等が「従来の俳句の概念の埒外で作句」した草城の営為として指摘されるが、とりわけ評価の中核に据えられているのは、「俳句という五・七・五の文芸の器にエロティシズムを形象化し得た俳人」(110頁)としての草城に他ならない。「草城の出現によって、「花鳥諷詠」の俳句の園にエロティシズムの花が開いたのである。俳句のエロティシズムは、草城によって確立された。俳句がエロティシズムを詠み得る文芸の器であることを、草城が出現するまでは、誰一人として気付かなかった。」(99頁)と論じる著者は、『花氷』所収の俳句作品の懇切な分析をとおして、またエロティシズムをめぐる草城の発言を参照することによって、そのエロティシズム俳句の本質を明らかにしてゆく。「聖なる肉感」「高雅なる慾情」を根幹として「詩の香気」を漂わせる作品と見做すのが、その結論である。発表当時に多大の反響を引き起こした連作俳句「ミヤコ・ホテル」についても同様の文脈で論じられることになる。『俳句とエロス』

(講談社現代新書)の著者ならではの指摘と言うべきであろう。日野草城の俳句の評価の枢要をエロティシズムに置くこうした立場に異論を抱くこともありえようが、著者がここで論じているのは、例えば「新興俳句」運動やモダニズムとの関連において往々にして「流行性」のもとになされる草城評価に対して、「不易性」を獲得しているその「作品の質の問題」であることを是非とも確認しておかなければならない。本書が意図しているのは、通例の草城評価への異議申し立てとして、「不易性」においてその作品を再評価することに他ならないのである。そしてそうした目論見が、客観的な論述に終始する所謂学術論文の体裁のもとになされるのではなく、研究者の視線と一人の読者としての眼差しとの見事な調和と均衡の中から紡ぎ出された、柔軟な、時に熱い思いに溢れた、また時にヒューモアを湛えた文章をとおして、読者への真率な語りかけとして実現されているのである。それは、著者の「評価」が広く読者に伝えられ、共有される上で不可欠の方策であると言ってよいだろう。従来の草城評価に修正を迫る本書が、良質の読み物としての面白さもまた豊かに備えていることは特筆されて然るべきところである。

しかしながら同時に、本書は日野草城に捧げられた単なるオマージュとしてあるわけではない。それは、本書の中にちりばめられている様々の指摘が、対象である草城とその作品を越えて、日本の近代文学の多様な問題に接続してゆく広がりをもっているからに他ならない。例えば、モダニズムは昭和初期の近代文学全体に影を落とした文学運動であるが、本書の草城俳句の分析は自ずと小説・短歌におけるモダニズムとの類同と差異を浮かび上がらせる。モダニズムに深い関わりを持った出版社第一書房

が『俳句文学全集』を刊行したことの指摘も、当時の運動の実体を窺い知る上で極めて興味深い。また「ミヤコ・ホテル」を中心とした連作俳句の問題は、言うまでもなく短歌に於ける連作との対比的な考察へと誘うものであるが、とくに時間性と場面性の巧みな導入により「物語性」を獲得している草城の連作俳句は、同時代の詩壇におけるシネ・ポエム等の前衛的な詩の試みを連想させ、当時における「詩」の所在の問題へと思考を導く。同様に「フィクション俳句」の問題も、先行する「詩」の概念の全面的な否定の下に新たな^{ポエジー}〈詩〉の探求が広範に試みられた同時代の詩壇の動向と深く連関するはずである。さらに本書で論じられる戦時中の草城の沈黙については、戦時下の文学総体の中でその意味が問われるべき問題でもあるだろう。そのように日野草城とその俳句作品を対象として縦横に論じることをとおして、同時代の文学的状況や他ジャンルの文学作品、そして文学の近代性等をめぐる諸問題への視野を開いている本書は、まぎれもなく優れた文学研究の書であると言ってよいのである。